

氏 名 : 林 洪
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博乙第 86 号
学位授与年月日 : 平成 28 年 3 月 15 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 2 項該当 論文博士
学位論文名 : 現代中国における日本語教育の理論と実践
—日本語の履修カリキュラムと日本語教材開発を中心として
論文審査委員 : (主査) 教授 松岡 榮志
(副査) 教授 高木まさき 教授 加藤 敏
教授 橋本 美保 教授 齋藤ひろみ

学位論文要旨

本論文は、筆者自身の指導経験や先行研究の成果をもとに、中国における日本語教育の指導要領と履修カリキュラムが、1980 年代以降どのように変化し発展を遂げてきたのかについて、論述したものである。さらに、こうした新しい指導要領や履修カリキュラムと共に変化してきた、日本語教材の発展のプロセスについて紹介し、そのありようについて具体的に論述した。特に、中学校・高等学校の教材、および大学の日本語科で使用される日本語教科書『総合日本語 (精読)』を取り上げ、その編纂の実際に関わる問題点、注意点について論述した。

80 年代以降、中国の教育界では、世界の他の国々と同様、21 世紀をどのように迎え、その後どう対応していくべきかについて注意を払ってきた。それは、日本語教育においても例外ではない。

中学校、高等学校における日本語教育の指導要領は、1982 年に施行された。大学レベルの専門外日本語 (日本語を第一外国語とする学生を対象としたもの) のための『日本語指導要領 (草案) 高等学校理工科本科四年制試用』(《日语教学大纲 (草案) 高等学校理工科本科四年制試用》) は 1980 年に施行され、『大学日本語指導要領』(《大学日语教学大纲》) は 1989 年に施行された。また、専門外日本語 (日本語を第二外国語とする学生を対象としたもの) である『日本語 (第二外国語) 指導要領 (草案)』(《日语 (第二外语) 教学大纲 (草案)》) は、1980 年に施行された。

大学の日本語学科を対象とした指導要領は、1990 年に施行された。1998 年に教育部 (日本の文部科学省に当たる) から出された『21 世紀に向けた外国語科の本科教育改革に関する若干の意見』(《关于外语专业面向 21 世纪本科教育改革的若干意见》) では、外国語学科が新世紀に直面する課題について模索し、外国語学科における教育改革の基本的な考え方が提示された。また、1999 年には中国共産党中央委員会および国務院から『教育改革の深化と素養教育の全面的推進に関する決定』(《中共中央国务院关于深化教育改革全面推进素质教育的决定》) が公布され、2001 年には『国務院によ

る基礎教育の改革と発展に関する決定』（《国务院关于基础教育改革与发展的决定》）が公布された。教育部も2001年に『基礎教育カリキュラム改革大綱（試行）』（《基础教育课程改革纲要（试行）》）を公布した。このカリキュラム改革は、現在も引き続き進められており、2012年に義務教育レベル向けの『カリキュラム標準』（《课程标准》）の改訂が終わり、現在は大学および高等学校向けカリキュラムの改訂作業が行われている。

大学の日本語学科を対象とした指導要領は、2000年に基礎レベルの指導要領の改訂版と高学年レベルの指導要領が出された。大学の専門外外国語のうち、日本語を第一外国語とする学生を対象とした指導要領については、2000年に『大学日本語指導要領（第二版）』（《大学日语教学大纲（第二版）》）が出され、2005年には日本語を第二外国語とする学生を対象とした『大学日本語第二外国語カリキュラム基準』（《大学日语第二外语课程要求》）が出された。2008年には、日本語を第一外国語、第二外国語とする一部の学生を対象とした『大学日本語カリキュラム指導基準』（《大学日语课程教学要求》）が出され、これにより指導要領の公布はほぼ終了した。目下、教育部はこうした指導要領の基礎の上に立ち、『日本語学科などの教育レベルの国家基準』（《日语类专业本科教学质量国家标准》）の制定に着手し（2011年7月）、発表の予定である。

本論文では、中学校・高等学校のカリキュラム標準および大学の日本語学科を対象とした指導要領を比較考察すると同時に、アメリカの外国語学習スタンダード（National Standards in Foreign Language Education）、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）および日本のJF日本語教育スタンダードとの比較考察を通じて、日本語教育の理念がどのように発展し、変化を遂げてきたのか、そして今後どのような方向に進んでいくのかについて分析した。

筆者は、1996から1999年まで中国の高等学校で使用される日本語教材の編集執筆に携わってきた。この教材は、これまでの指導要領の枠組みの中で編集されたものである。カリキュラム履修基準や学習者に応じた各種の指導要領が陸続と発表されるのに伴い、中学・高校、大学（専門および専門外のいずれも）で使用する日本語教材も、次々に出版されている。教育部は、2001年に義務教育レベル向けの『カリキュラム標準』（実験稿）を発表して以来、この新たなカリキュラム標準に基づいた各種教材の編集作業の奨励につとめている。これまで、こうした教材の編集作業は、教育部直属の出版社である人民教育出版社や各地方の教育出版社の主管であったが、今回の編集作業ではこれまでのやり方が見直され、どの出版社でも教材審査委員会に申請し、その審査に通れば、編集作業に入ることができるようになった。編集が終了した教材は、教材審査委員会に提出され、審査を通過してはじめて印刷に回され、各地の小、中学校の選択に任される。

筆者は、これまで長期にわたり中学・高校向け日本語教材の審査に携わってきた。そのほか、筆者は2004年に論文「日本語教科書と英語教科書の一比較——学習プロセスの視点から」を発表し、北京日本学研究中心の精読教材に関する研究プロジェクトに参加してきた。また、2006年からは『日本語科用基礎レベル教材シリーズ』

の編集執筆に参加してきた。この教材は、2010年に出版され、2012年には教育部認定優秀教材に選ばれた。

本論文では、筆者がこれまで携わってきた三種類の教材編集と審査経験をもとに、ここ十年あまりの間に編纂された中学校・高等学校向けおよび大学日本語学科向けの日本語総合教材の編集状況と比較しながら、近年の日本語教材編集の問題点、さらには今後の発展の動向について分析した。

最後には、筆者自身の教材編集のプロセスを踏まえつつ分析し、指導要領、教材を一体化する必要性および実行可能性、そして、日本語教育による能力の育成について考察した。

キーワード

カリキュラム、教材、能力の育成、日本語教育、現代中国